



第4図 オホーツク海沿岸の解氷期の日平均気温の変動

たところ、第4図のような結果が得られた。なお図中ハッチをほどこした部分は、67年が66年よりも高温であった期間を示している。

つぎにこの図から両年の気温変動の違いをあげてみると、

西部では67年は全般に66年に比べてかなり暖かく、ときに10°C以上も高目という異常高温の日が出現した。また高温傾向は解氷後期(4月16日—5月15日)に顕著で、第2表に示したように、平均気温では相対的に6°Cも高目という異常な事態で経過している。

第2表 オホーツク海沿岸の解氷期の平均気温

年	西部(アヤン)			東部(イチヤ)		
	前期	後期	全期	前期	後期	全期
1967	-5.6	+3.2	-1.6	-7.1	-1.1	-4.1
1966	-7.0	-2.5	-4.8	-3.4	-0.7	-2.0

ところが逆に東部では、67年は66年よりやや冷たく、とくに解氷前期(3月16日—4月15日)では相対的に4°Cほど低温という、東西まったく相反した現象を呈している。

そこでこれらの気温変動と、第2図および第3図の海水域の崩解過程を対照してみると、高温が崩解を促進し低温が崩解を鈍化させるという、両者の相互関係がきわめて明瞭に示されていることが分る。

すなわち、他の条件がすべて同じであるという仮定のもとでは、67年後期のオホーツク海西部における異常高温が氷域の急激な崩解をひき起し、このため北西海域は異常に早く氷から開放されたものとみることができ。これとは逆に東部における前期の相対的な低温は、氷域の崩解を前年よりかなり遅らせる結果となり、氷は北東海域だけに偏って残存し、さらに後期も低温ぎみで経過したため、海水域はシェレホフ湾にむかってゆっくりと縮少していったと解釈できよう。

同様に66年は、東部における全期間の相対的な高温が、カムチャッカ半島西岸の氷域の早期崩解を促し、他方西部の相対的な低温が北西海域における氷域の崩解を鈍らせたため、結果的には海水域を南東から北西へと順調に後退させていったと考えられる。

さらに第1表と第2表の照合から、解氷期間中の気温と解氷日数とがほぼ逆に対応する事実がみいだされるなど、いずれにせよ気温が海水域の崩解についての決定的な要素であることは十分に立証できる。

参考文献

- 1) 渡辺貫太郎(1966): オホーツク海の海氷、海の気象、第11巻第1号、26-44.
- 2) 沢田照夫(1962): 流氷による漁船の海難、船と気象 第70号
- 3) 今井一郎(1967): APT 写真でみた1966年の流氷退去状況

[訂正] VoL. 15, No. 11. 掲載『新刊紹介』

『雪と雨の物理』は『雲と雨の物理』の誤り。紹介者名、孫野長治が落ちていましたのでお詫びします。(天気編集委員会)